広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	第二次世界大戦期におけるニコス・カザンザキスの文学活動 ：「ギリシア性」の探究を中心に
Author(s)	福田，耕佑
Citation	プロピレア ，22 ：24 - 37
Issue Date	2016-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041554
Right	Copyright (c) 2016 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

第二次世界大戦期における
ニコス・カザンザキスの文学活動
―「ギリシア性」の探究を中心に―

福田　耕佑

1. はじめに

本稿では 20 世紀のギリシアを代表する作家であるニコス・カザンザキス（1883-1957）の第二次世界大戦期の文学作品を取りあげる[1)]。そしてナチス・ドイツによるギリシア占領期において、カザンザキスが文学作品の執筆を通してギリシア・ギリシア人とは何かという問いに挑み、古典古代の栄光と恩恵に依拠しないギリシア人像を描き出そうとしたことを論じる。

2.本稿のねらい

カザンザキスは、ギリシアを代表する作家の一人としてみなされているが[2)]、彼自身が如何なるギリシア・ギリシア人観を抱いていたのか、或いはそれがカザンザキスの作品の中にどのように表現されたのかを説明する研究はほとんど見られない。また従来の研究では、彼のキリスト論や神学論等の普遍的な要素や形而上学的な要素を扱った研究が大半を占めている。

執筆者は、本稿を通してカザンザキスが自身の作品を通して、彼のギリシア・ギリシア人観を実際に表明していたことを明らかにする。特に第二次世界大戦期の作品を取り上げ、彼のギリシア・ギリシア人観の起源と特徴、また彼の思考が同時代の他のギリシア人作家達や一般的なギリシア・ナショナリズムで捉えられるギリシア人観とは異なる思想を持っていたことを中心に論じたい。

3. 背景

本節では第二次世界大戦期のカザンザキスのギリシア・ギリシア人観を考察

するための背景説明を行う。以下、本節第一項では「ギリシア・ナショナリズム」について、第二項では第二次世界大戦期におけるギリシア簡史について、そして第三項では第二次世界大戦期のカザンザキスの動向について紹介する。

3.1. ギリシア・ナショナリズムの背景

本節ではカザンザキスのギリシア・ギリシア人観の背景となるギリシア・ナショナリズムの歴史的経緯について、村田[3]や松浦[4]、またマクリッジ[5]の先行研究に依拠しながら略説する。

現代ギリシア人のギリシア意識またギリシア・ナショナリズムの大きな特徴は、相反する二つの起源神話を持つ、古典古代と中世ビザンツという過去を結び付け単線的な歴史観を描こうとしている点である。

そもそも中世・ビザンツ期には、ギリシア人達は自分たちを「ロミィ」(Ρωμιοί)、つまりローマ人・ローマ帝国臣民と呼称していた。これは一つ目にローマ帝国の臣民であること、二つ目に正教徒であること、三つ目にギリシア語話者であることを含意している[6]。彼らにとって、古典ギリシア人は異教徒であり、直接的な結びつきを持たないものとして想像された。

19 世紀前半のオスマン帝国からの独立期にはギリシア啓蒙主義が起こり[7]、ギリシア人たちの間で、中世的な「ロミィ」ではなく、偉大な古典ギリシア人の子孫としての現代ギリシア人という意識が芽生える。例えばコライスは、ギリシア人にロミィの代わりに、「グレキ」(Γραικοί) という自称を用いるように提案した[8]。この「グレキ」という言葉は、旧体制的な正教会・ビザンツ帝国の否定と、自分達ギリシア人が古典古代という偉大な先祖の直系の子孫であるという意識を反映している。

このような古典古代との紐帯のみを重視して、ビザンツ・中世を無視しようとする動きに対し、パパリゴプロスは啓蒙主義とは異なり、身近な中世ギリシアとの連続性を重視し、ギリシア史を古典古代から中世ビザンツを経て現代まで一続きの紐帯として叙述しようと試みた[9]。こうして、相いれないはずの古典古代と中世ビザンツが連続するものとして一直線に結び付けられることになった。

このようなギリシア・ギリシア人意識の背景の下、19 世紀の「偉大な理想」が現れたのである[10]。これは簡単に言うと、現代ギリシア人達が過去の古典古代ギリシア人達の子孫であるという主張や信念に基づき、自民族の優越性を誇るとともに、過去の領土を失地回復する名目で対外領土拡張政策を合理化する

思想であった。こうしてオスマン帝国下にある「民族的、歴史的見地からギリシア的と見なされる土地」、特に中世ギリシア世界の中心であったイスタンブール（コンスタンティノープル）のギリシア王国への編入を目指した対外拡張戦争が繰り返されることになった。本稿で扱うカザンザキスも 1912 年にバルカン戦争に従軍するなど、「偉大な理想」は多くのギリシア人に影響を与えた。しかし第一次世界大戦後のスミルナ陥落による小アジア領消失とローザンヌ条約による現トルコ共和国領承認により、ギリシアの領土拡張政策は失敗に終わり、事実上「偉大な理想」は失敗した。

ここまで見てきたように、現代ギリシアのギリシア・ギリシア人意識の特徴は、過去との単線的な結びつきの強調と、その過去の栄光への依拠、そして最終的に軍事拡張政策に結びついてしまった、という点に集約できよう。

3.2. 第二次世界大戦期のギリシアの情勢

本項では第二次世界大戦期にギリシアが置かれていた状況とカザンザキスの執筆、及び政治活動の状況について、ウッドハウス[11]やゼルミアス[12]の先行研究に依拠しながら、簡単に記述する。

第二次世界大戦の枠組みの中でギリシアが初めて軍事侵攻にさらされたのは 1940 年 10 月のイタリア・ムッソリーニによるアルバニア戦争である。ここでギリシア軍はイタリア軍を撃退し、反撃することに成功するも、41 年 4 月にはナチス・ドイツによる進軍を受け、5 月にはギリシアのほぼ全土が占領され、国王、政府ともに亡命を余儀なくされる。以降は独軍占領の下、各地でレジスタンス活動が繰り広げられる。そして 44 年 9 月に独軍がギリシアから撤退したことを受け、ギリシアは解放される。

この時期にナチス・ドイツ軍が行った特筆すべきこととして、後の内戦の契機の一つとなるギリシア人の間での対立構造が確立されてしまったことが挙げられる。具体的には冷戦構造がギリシア国内においても現れ、王党派・政府側と共産主義勢力の二者が激しく対立した。ギリシア占領以後のレジスタンス活動は主に共産主義勢力が中心となって行われ、その際イギリスも対独のために共産主義勢力等にも援助を行った。しかし共産主義勢力の中で、将来のギリシア像をめぐって分裂が生じ、味方同士で闘い始めるともに、元来敵対していた王党派とも戦闘を起こすなど、ギリシア人同士の間での戦いが発生し始めた。このギリシア人同士の内輪もめをさらに利用して占領政策のために利用しようと、独軍は 44 年 2 月に傀儡政権に治安大隊を設置させた。共産主義に脅威を感

じた多くのギリシア人達が治安大隊に加入し、ギリシア人の間の溝はさらに深められることになった。本項では触れないが、このようなギリシア人同士での対立の構造は、亡命していた国王のギリシアへの帰還問題を巡って武力衝突に結びつき、ギリシア内戦へと発展していく [13]。上記のように、ナチス占領下の中でギリシアの情勢は対独レジスタンス活動や同士討ちによって混迷を極めていた。

しかしこのような政治的に混乱した状況にあって、ビヤンの指摘するところでは、ギリシアが第二次世界大戦の戦火に巻き込まれて以来、パラマス [14] やシケリノス [15] そしてセフェリス [16] 等のギリシア人作家や知識人達が、特に古典古代をテーマにしたギリシアに関する作品を書き始め、ギリシア性（Greekness）の探求を行った点は特筆に値する [17]。次項において説明するが、カザンザキスもその例外ではなく、「ギリシア性」の探究を行うための文学活動をこの時期に展開している。このように第一次世界大戦後の「偉大な理想」の崩壊によって軍事的な対外拡張と結びついた戦闘的なナショナリズム運動はほとんど顧みられることがなくなってしまったが、第二次世界大戦期において外国による自国の占領と荒廃を機に、自民族を見つめ直そうとする精神的な風潮や文学作品が見られたという指摘は、現代ギリシア文学史においても看過されえない [18]。

3.3. 第二次世界大戦期のカザンザキス

本項では、ジャニオ・リュスト [19] の伝記やビヤン [20] の先行研究に依拠して、カザンザキスの動向とこの時期に執筆された作品について紹介する。

40 年にアルバニア戦争が勃発した時、カザンザキスはエイナ島に滞在していた。後にエイナ島がドイツ軍に占領され、カザンザキスは 41 年の間エイナ島において食糧不足と戦火に苦しめられることになる。この時期、アッシジのフランチェスコについての伝記を含め多くの本を読み、限界状況の中で『その男ゾルバ』執筆の構想を膨らませていった。そして 42 年の 1 月に友人たちの招きを受けアテネに赴き、ギリシア人のために戦う決心をする。そしてカクリディスという教授と共に『イリアス』の現代語訳を行った。また 43 年から 44 年の間はエイナ島で作品の執筆に専念する。43 年春には『その男ゾルバ』を執筆し [21]、44 年 1 月には戯曲『プロメテウス』三部作を完成させる [22]。続く 44 年 7 月には戯曲『カポディストリアス』を完成させ [23]、残りの期間で戯曲『コンスタンディノス・パレオロゴス』を執筆するとともに [24]、ここまでに執筆した作品の推敲を行った。このようにカザンザキスは古代から現代までのギリシアを扱った

作品を数多く創作した。

ナチス・ドイツ撤退後の 45 年の 1 月、カザンザキスはアテネに移住する。5 月にカザンザキスは「社会主義労働者党」を結成し、これによって独軍占領期より互いに反目していた共産主義勢力の統合を目指した。6 月には党綱領を発表し、またギリシア・アカデミーの会員に選出される。そして 9 月にはソフリス内閣の無所属大臣に選出され、またギリシア作家協会よりノーベル文学賞候補に推薦される。11 月には先述した社会主義勢力の統合に成功したとして大臣を辞任し、また長年生活を共にしていたエレニ・サミウと正式に結婚する。そして特筆すべきこととして、1923 年に第一版が書かれた『禁欲』の最終版を出版する[25)]。また 46 年に『その男ゾルバ』を出版する。そして同年 4 月からはロンドンの議会に招かれ、7 月には「英国知識人との戦後対話」という名の演説を当地で行い、パリに移住する[26)]。47 年の 1 月には生活状況の悪化を受け、48 年の 3 月までユネスコでの仕事を続けた。

ここまで第二次世界大戦期のナチス・ドイツによる占領期の中で、カザンザキスがギリシアを主題に置いた作品のみ書いたことを確認した。特筆すべきこととして、著作のタイトルが全てギリシア人の英雄の名前或いは名前を中心においたものであること、そしてこの英雄たちがギリシアの神話時代から現代に至るまでの全時代に及んでいることである。特にこの間に自分自身やギリシア・ギリシア人について考察を深め、一年以上の年月をかけて作品を執筆し自身の思考を結晶化させたことが、後のアテネにおける政治活動やギリシアを立て直すための運動へと繋がっていったのであろう[27)]。

以上本節において、カザンザキスが第二次世界大戦期に置かれていた状況と、同時期のカザンザキスの文学作品がギリシアのための政治活動に結び付けられたことを確認した。

4. 第二次世界大戦期のカザンザキスの作品分析と「ギリシア性」

本節では、第二次世界大戦期のカザンザキスのギリシア・ギリシア人についての考察について、この時期の文学作品には一貫した「ギリシア性」に関する描写がみられることを論証する。3 節で述べたように、第二次世界大戦期のカザンザキスは、他のギリシア人作家達と同様にギリシア・ギリシア人についての考察を巡らしていた。本稿では、この時期のカザンザキスが「ギリシア性」に見出したものは「運命（η μοίρα）への反逆」と「自由（η ελευθερία）のための闘争」であると考える。

（ｉ）「運命（η μοίρα）への反逆」について

該当時期のカザンザキスにとって「運命」には二つの意味がある。一つ目は人間の死という古代ギリシア以来の元来の「運命」の意味と、もう一つは現代ギリシアが辿った歴史・「運命」である。

一つ目の「運命」は『禁欲』で取り上げられるカザンザキス思想の形而上学的、或いは宗教的な議論の観点からの「不死」に関するものである。確かに『コンスタンディノス・パレオロゴス』にもカザンザキスの「運命」としての死に関する描写が存在する [28)]。しかし思想や宗教における不死の観点からみた「運命」に関しては、彼のギリシアに関する思想との直接の関連が希薄であり、本稿の問題意識には適さないので稿を改めて論じたい。

もう一点の「運命」はギリシアの歴史に関するものである。カザンザキスにとってギリシアの歴史は被支配と抑圧の歴史に他ならなかった [29)]。彼はギリシアの歴史について、古典古代といった栄光ある過去ではなく、ギリシアが辿ってきたコンスタンティノープル（現イスタンブール）やクレタ島の陥落と異民族・異教徒、近代では西欧列強による支配と抑圧の歴史を語った。確かにカザンザキス自身が「ギリシア性」或いは「ギリシア人気質」に言及する時に、Ρωμιοσύνη（Romiosini）という単語を使用しており、彼がギリシアを描くときに栄光に満ちた理想の古典ギリシアのみを描こうとしたわけではないことは明白である [30)]。そして重要なこととして、この時期に創作された 4 作品の主役達は全員、これから確認するように、自分達のこの「運命」を背景・前提とした上で、それに抗う反逆者として描写されている。

一作目の『その男ゾルバ』ではゾルバという名が示す通り彼の人生そのものが苦難や因習に対する反抗である [31)]。作中で、彼自身「人は死が近づいてくれば首を出して、「どうか首を切ってくれ、そうすれば天国に行けるから！」と頼むそうだが、わしはそんなことはしねえ、わしは長く生きればそれだけ強く反抗するようになりますよ。わしは降参なんかしねぇ。世界を征服してやりますぜ」と述べている点からもこのことが窺える [32)]。残りのギリシアの歴史を題材にした三作では、プロメテウスはゼウス神によって課された磔刑に抗う。アテネやバッコスがゼウスに従うようにプロメテウスに説得を試みるが、彼は自分が人間の幸福を思い人間達に行った火を与える行為の正しさを信じ、パンドラの裏切りにも耐え、ヘラクレスによる解放まで耐え続ける。カポディストリアスとコンスタンディノス・パレオロゴスは両者ともトルコという歴史上の敵が

存在し、抑圧への反抗という構図がわかりやすい。しかし単にこれらの作品では眼前の敵に対する反抗に尽きず、必ず「運命」への反抗が意識されている。プロメテウスは第一作一幕で、人間達が自分の「運命」を嘆き、その支配の前に膝を屈そうとする時に、「否、否、否」（Όχι, Όχι, Όχι!） と反抗の「叫び」をあげ[33]、打ちひしがれた人間達を罵倒する[34]。カポディストリアスは「運命が全能なのではない、自由で清い、絶望しない人間の魂こそが全能なのだ」と[35]、またコンスタンディノス・パレオロゴスは「私は自由に（自分の意志で/λεύθερα）宿命に従う。（中略）それは男らしく絶望と闘うことだ」と述べる[36]。この絶望こそが、1453 年にギリシアが直面した、帝都陥落の歴史であり、「運命」に他ならない。この 4 人の主役達は皆、古代から現代までのギリシアを背景に、自分達に加えられている抑圧に抗い、闘争を企てた者達である。しかし、反逆者としての彼らは成功することはなかった。ゾルバは年老いて死に、コンスタンディノス・パレオロロゴスは帝都コンスタンティノープルの陥落と共に戦死し、カポディトリアスも彼の独裁を恐れた反対者によって暗殺される。またヘラクレスによって解放されたプロメテウスに栄光が戻ることはなかった。カザンザキスがこのように言わばギリシアの敗北者・被支配者としての歴史を描き、栄光にあふれる勝利者としての姿を描き出さなかった理由は、主人公達自身の反逆の成功、或いはギリシアの栄光ある姿そのものが問題なのではなく、反逆して立ちあがることそのものが重要だと考えていたからであると考えられる。この理由は次の（ⅱ）の「自由のための闘争」と深く関わる。

このように、カザンザキスは特にギリシア民族の「運命」を軸に文学作品を描いた。これら時代の異なる 4 作品において、彼は同じギリシアを題材にし、カザンザキスは抑圧に対して反抗する反逆者としてのギリシア人主人公達を描いた。ここにゼルミアスが主張したギリシアの歴史を通して一貫した同じ雰囲気が見出されるのではないかと考えられる[37]。カザンザキスが決して栄光に満ちた場面だけではない、一貫したギリシアの歴史という意識を持っていたことは、『コンスタンディノス・パレオロゴス』において皇帝がトルコ人に降伏をすすめられる場面に見られる、「親愛なる数千に及ぶ先祖が、何千年間も私達を見ている、彼に言ってやれ、私は逃亡を恥に思う」という台詞や[38]、『カポディストリアス』の「三千年の間二人の偉大なギリシア人達は闘い続けている」からも明らかである[39]。カザンザキスは第二次世界大戦期に先述の通り古代から現代までのギリシアを取り扱っているが、このことはカザンザキスがギリシアの歴史が古代から現代まで一直線に繋がっているということを意識しているから

に他ならず、ビヤンが挙げたギリシア性の「ギリシア民族の持続・生き残り（continuity）」の重要な根拠ともなっている。しかしこの「ギリシア民族の持続・生き残り」に尽きず、ビヤンの言うカザンザキスのギリシア性に加えて、本稿作成者は「反逆者としての生き様」を加えるべきであると考える。そしてこの反逆の先には、次項で見る「自由」がある。

（ⅱ）「自由（η ελευθερία）のための闘争」

カザンザキスは、先述の被支配と抑圧の歴史・「運命」への反抗を通して、ギリシア民族は自分達の民族に固有の使命である「自由」を自覚するようになったと述べている[40)]。ギリシア民族にとって「自由」は特別な意味を持つ。先述の通り、カザンザキスにとってギリシアの歴史はビザンツ帝国の首都コンスタンティノープル（現イスタンブール）の陥落や多くの民族に代わる代わる支配されたクレタのような、被占領と抑圧の歴史であった。しかしこの苦難の歴史を通してこそ、ギリシア人は自分達の本質であり、また人類に対する使命である「自由」を自覚するようになったと述べている[41)]。そして後述するが、この反抗は、後の思想作品『禁欲』で述べられる「自由のための闘争」にも関連する。

当該作品の主人公達はそれぞれ先程の「運命」からの、つまり被支配と抑圧からの解放・「自由」を企図して反抗を繰り広げていた。例えば、ゾルバはカザンザキス本人が「最も自由な叫び」と称したように[42)]、作中で「わしゃ自由になりてぇと思う者だけが人間だと思っとります」と述べていた[43)]。また「その時代には（先史時代）、「叫び」こそ現在私達が詩、音楽、思想と呼んでいる全てのものを内に含んだ偉大な総合芸術であったのだ。「あぁ、あぁ！」。「叫び」はゾルバの存在の深い内部から出てきた。そして私達が文明と呼んでいる薄っぺらな皮全体はわれてしまい、そこから、不死の野獣、毛むくじゃらの神、恐るべきゴリラが出てきたのである」と述べられている[44)]。またプロメテウス、カポディストリアス、コンスタンディノス・パレオロゴス達もそれぞれが歴史上の被支配からの「自由」を求めて戦う存在であった。

またカザンザキス作品の主役達は、例えば『コンスタンディノス・パレオロゴス』のトルコ軍との戦闘を前にした状況で、その闘いは「死の上り坂を登り切るだけだ」と表現されるように[45)]、ギリシアを舞台に描かれたギリシアのために闘い、ギリシア性を表現するための「英雄」というだけではなく、カザンザキスは彼らを、『禁欲』で見られた闘いを遂行する「英雄」としてもみなして

いると考えられる[46)]。この「英雄」達はギリシアのために闘い、「叫び」をあげ、「自由」を求めて戦い続ける存在である。

「英雄」達の戦いの中で、彼らが実際に「自由」を手にするかどうか、それそのものは重要でない。なぜなら実際にこの時期の文学作品の主役・「英雄」達は政治上の「自由」を達成してはいなかったことに加え、『禁欲』の「英雄」にとっても、自身の「自由」を自分の力で、自分が生きている間に達成することが重要なのではなかった。そうではなく、「「自由」のために反抗し闘うこと」そのものがカザンザキスにとって重要なのである。このようにカザンザキスの「自由」は、思想的著作『禁欲』にみられる思想的な面での「自由」を下敷きにしていた。だが、古代から現代までの直線的なギリシアの英雄の被支配と抑圧への反抗の歴史を描くことによって、彼の「自由」は彼の文学作品の中でギリシア的なものとして主題とされるに至ったのである。

カザンザキスの「自由」は普遍的な要素を持ちつつも、ギリシアの探求に根差したギリシア的なものであり、まさに第二次世界大戦での経験を通して、文学作品の中に結晶化したものであると言えよう。

5. まとめ

本稿ではカザンザキスの第二次世界大戦期の動向に焦点を当てながら、カザンザキスの文学作品の中に彼のギリシア・ギリシア人観を見出す試みを行った。彼の第二次世界大戦期におけるギリシア性の重要な点は、ビヤンも指摘したようにギリシア人が被支配と抑圧の中での生き抜いてきた「ギリシア民族の持続・生き残り（continuity）」にあった。しかしこれは単に偉大な過去の栄光にすがり、また過去のギリシアの中に理想のギリシア像を投影しようとするためではない。まず惨めなギリシアの「運命」としての歴史を受け入れ、これに対し諦めずに政治的な解放を求めて反抗し、生き抜いてきたギリシア人の姿に、カザンザキスはギリシア人の徳としての「自由」を見た。そしてこのギリシア・ギリシア人の闘争や「自由」を含むカザンザキスの「ギリシア性」は、多くの他の作家達や一般的なギリシア・ナショナリズムのように栄光ある古典古代に依拠し、それを意識したものではなく、過去から現在まで生き続けているギリシア人から出てくるものである。まさにギリシア全体の歴史を念頭にいれることで過去と現代との紐帯を持ちつつも、自分たちの過去に縛られることなく、ギリシア・ギリシア人とは何か、ということを考え著作した点が彼の独創的な点である。

注

1) Νίκος Καζαντζάκης（1883-1957）: 1883 年ギリシア・クレタ島で生まれる。1906 年にアテネ大学法学部卒業後パリに留学し、ベルクソンやニーチェの哲学に触れる。12 年はバルカン戦争に従軍する。17 年ヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山経営を行い、後の『その男ゾルバ』のモチーフとなる体験を得る。19 年ヴェニゼロス内閣で厚生局局長として南ロシア、コーカサス地方のギリシア人難民の本国帰還を支援する。22 年ウィーンで仏教、そしてフロイトの研究を行う。その後には共産主義に傾倒するようになる。その後の 3 度にわたるロシア訪問で共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭。第二次世界大戦期はレジスタンス活動に従事し、独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。48 年からはフランスに移住し、執筆に専念する。そして 57 年フライブルクで客死する。代表作は『キリストは再び十字架に』、『キリスト最後の誘惑』、『オディッシア』。
2) 例えば一般書においてもグロスザミスの『二十世紀のギリシア人 25 選』（Γκροσδαμης, 2009）の中で取り上げられたり、クレタ島にカザンザキス博物館が存在することからもうかがえる。
3) 村田 (2013).
4) 松浦 (2012/2).
5) Mackridge (2009).
6) 村田 (2013 : 189-190).
7) この時期の民族意識の研究に関しては、先述の松浦 (2012/2) が詳しい。
8) Ἀδαμάντιος Κοραῆς（1748-1883）: ギリシアの知識人。ギリシア啓蒙主義の第一人者であり、ギリシア独立戦争以前、オスマントルコ支配を宗教的に正当化する東方正教会を攻撃し、国内でトルコに対する革命的雰囲気を醸成することに貢献した。特にギリシア古典世界と現代ギリシア世界の紐帯を強調し、古典ギリシア文献学でも大きな功績を残す。ギリシア口語を否定する純正語（文語）の創始者。
9) Κωνσταντίνος Παπαρρηγόπουλος（1815-1891）: アテネ大学教授を務めた歴史家。反啓蒙主義的立場を取り、中世ビザンツ世界の復権を唱えた。代表的著作は『ギリシア民族の歴史』（*Ιστορία του ελληνικού έθνους*）.
10) 村田 (2012 : 75-76)。Μεγάλη Ιδέα が初めて正式に言及されたのは、1884 年の憲法制定議会でのイオニアス・コレッティスの演説であるとされる。
11) ウッドハウス (1997).
12) Tzermias (1986).
13) この時期のカザンザキスの文学活動については、福田 (2015/5) を参照。
14) Κωστής Παλαμάς（1859-1943）: ギリシア文学史の「1880 年世代」に数えられ、また新アテネ派の創設者とされる詩人。多くの作品を創作した。ヘレニズム的な色彩の強い

口語作品が特徴とされる。

15) Άγγελος Σικελιανός（1884-1951）: ギリシアの詩人・劇作家。カザンザキスの友人。新アテネ派の創設者であり、第二次世界大戦期当時の代表的詩人であるパラマスが死去した際、葬儀で弔辞とギリシア民族を激励する演説を行う。この時期に『クレタのダイダロス』等のギリシアを扱った作品を残す。

16) Γιώργος Σεφέρης（1900-1971）: ギリシアの詩人・外交官。ノーベル文学賞を受賞した。父親が「偉大な理想」を辛抱するヴェニゼロス主義者であり、青年期に多くの影響を受ける。

17) Bien (2007 : 167).

18) 第二世界大戦期のカザンザキス以外の作家の動向や作品研究、また第一次世界大戦期から第二次世界大戦期にかけてギリシア・ナショナリズム的な潮流や文学作品のモードが質的にどのように変化したのかについてのギリシア史・ギリシア文学史全体を射程に入れる研究は本稿作成者の今後の課題としたい。

19) Janiaud-Lust (1970).

20) Bien (2007).

21) *Βίος και πολιτεία του Αλέξη Ζορμπά*（*Zorba le Grec*）. 主人公はギリシア人の父の遺産と炭鉱を相続するためにギリシアにやってきた。そこでアレクシス・ゾルバと出会い、彼を雇う。ギリシア人・ゾルバは楽天的、放縦だが、ありあまるエネルギーをもっており、性格は主人公と異なるが意気投合するようになる。村での騒動、愛する者の死、事業の失敗などを経験するも、強く生きていくギリシア人を描く。

22) Προμηθεύς. プロメテウスは、ゼウスの反対を押し切り、人類が幸福になるようにと天界の火を与えた。後にゼウスは彼をコーカサスの山頂にはりつけ、生きながら毎日肝臓をハゲタカについばまれる刑を課した。プロメテウスは自身が愛し、彼女のために罪を犯しさえしたパンドラにも裏切られ、弟エピメテウスと共に出奔されてしまう。最終的には解放主ヘラクレスによって救われる。

23) Ιωάννης Καποδίστριας : カポディストリアス（1776-1831）は ロシア帝国の外務大臣、後にオスマン帝国から独立したギリシアの初代大統領。独立後様々な改革を行うが、在来の地方有力者や農民の支持が得られず、対立した貴族によって暗殺された。この悲劇はトルコからの独立前夜の彼の心理や同胞ギリシア人との葛藤を描く。

24) Κωνσταντίνος ΙΑ' Παλαιολόγος : コンスタンディノス 11 世（1405 -1453）は東ローマ帝国最後の皇帝。この悲劇で皇帝が何故このような運命にギリシアがあるのか、ギリシア人として闘うことの意義を臣下に説明しながら、トルコ人との闘いの中に身を投じる。

25) *Ασκητική*（副題は *Salvatores Dei*）. 1923 年、共産主義に没頭していたころに書かれ、1945 年の終戦後まで書き加えられたカザンザキスの哲学的、形而上学的主著。本人はあらゆる彼の作品はこの本に書かれていることの注釈、解説である、と述べている。あらゆる存在は「物」に至るまで、「内なる叫び」に従って上昇する。この「叫び」は所謂

「神」であり、この「神」は英雄的な人間に叫び、彼を突き動かして上昇させ、自分自身の「救済」を意図し、「自由に向けての闘い」を開始する。この際、救済と自由の関係は明白ではない。

26) 同年 5 月よりギリシア北部にユーゴスラヴィア軍が進軍し、ギリシアにおいて戦闘が開始され、49 年 10 月まで続くギリシア内戦に突入する。

27) 彼のギリシア解放後の政治活動と彼の思想や文学作品との影響関係に関しては稿を改めて論じたい。

28) Kazantzakis (1956 : 530)　帝都陥落時、コンスタンディノス帝と部下のフランヅィス（Φραντζής）との会話において、皇帝が絶望せず、希望を抱いていることを語る。皇帝は部下にキリストの最後の言葉を尋ねる。それは「成し遂げられた」（Τετέλεσται）であり、皇帝はトルコ人でもフランク人でもなく、死こそが彼の希望であることを述べる。それは避けられない「運命」である死こそが「人間の最も神的な瞬間である」からに他ならい。この思想の背景には『禁欲』の不死論が反映されているだろう。

29) Kazantzaki et Sipriot (p.39).

30) Kazantzakis (1971: 27).

31) アレクシオス・ゾルバのモデルとなった人物は、カザンザキスが共に炭鉱経営を行ったヨルゴス・ゾルバスである。ゾルバス（Ζορμπάς）の名前の由来はトルコ語の Zorba （反乱者）だと考えられる。ヨルゴス・ゾルバスと出会ったことは偶然であろう。しかし彼の姓は、このカザンザキスの小説のテーマにふさわしいものである。

32) Kazantzakis (1981a : 88).

33) Kazantzakis (1955 : 22).

34) Kazantzakis (1955 : 23).

35) Kazantzakis (1956b : 115).

36) Kazantzakis (1956a : 511-512).

37) Tzermias (2001 : 140).

38) Kazantzakis (1956a : 257).

39) Kazantzakis (1956b : 29).

40) Kazantzaki et Sipriot (p.39).

41) 同上.

42) Bidal-Baudier (1974 : 125).

43) Kazantzakis (1981a : 162).

44) Kazantzakis (1981a : 163).

45) Kazantzakis (1956a : 512).

46) 福田 (2015/5, 112).

参考文献

一次文献

Kazantzaki et Sipriot, *Entretiens*, Edition de Rocher, Monaco, 1990.

Καζαντζάκης Νίκος (1955) *Θέατρο Α`*, τραγωδίες με αρχάια Θέματα. Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,（『プロメテウス』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1956a) *Θέατρο Β`*, τραγωδίες με Βυζαντινά Θέματα. Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,（『コンスタンディノス・パレオロゴス』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1956b) Θέατρο Γ`, *τραγωδίες με διάφορα Θέματα.* Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,（『カポディストリアス』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1971) *Συμπόσιον*. Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,（『饗宴』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1981a) *Βίος και πολιτεία του Αλέξη Ζορμπά.* Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,『その男ゾルバ』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1981b) *Ο Χριστός ξανασταυρώνεται*. Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,『キリストは再び十字架に』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1982) *Οι Αδερφοφάδες.* Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,（『兄弟殺し』）.

Καζαντζάκης Νίκος (1985) *Ασκητική: Salvatores Dei*. Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα,『禁欲』第三版）.

二次文献

Γκροσδαμης, Γιάννης (2009) *Οι 25 Έλληνοι σπουδαιότεροι του 20ού αιώνα.*Αρχετυπο, Αθήνα.

Δημαράς, Κ. (2010) *Ιστορία της Νεοελληνικής λογοτεχνίας – από τις πρώτες ρίζες ως την εποχή μας*. Εκδώσεις Γνώση, Αθήνα, pp. 574-575.

Πολίτης, Λίνος (2014) *Ιστορία της Νεοελληνικής λογοτεχνίας*. Μορφωτικό Ίδρυμα Εθνικής Τραπέζης, Αθήνα, pp. 251-279.

Bidal-Baudier, Marie-Louise (1974) *Nikos Kazantzaki: Comment L'Homme devient immortel*. Plon, Paris.

Bien, Peter (2007) *Kazantzakis: Politics of the Spirit*, vol.2. Princeton University Press, Princeton.

Janiaud-Lust, Colette (1970) *Nikos Kazantzaki sa vie, son oeuvre 1883-1957*. François Maspero, Paris.

Kadelbach, Ulrich (2006) *Mit Kazantzakis auf den Athos: Kretische Spuren.* Balistier Verlag, Kusterdingen.

Mackridge, Peter (2009) *Language and national identity in Greece, 1766-1976*. Oxford university press, Oxford.

Terrades, Marc (2005) *Le Drame de l'Hellénisme – Ion Dragoumis（1878-1920）et la question nationale en Grèce au début de XXe siècle.* L'Harmattan, Paris.

Tzermias, Pavlos (1986) *Neugriechische Geschichte: Eine Einführung*. A. Francke verlag GmbH Tuebingen, Tuebingen.

Tzermias, Pavlos (1987) *Die neugriechische Literatur.* A. Francke verlag GmbH Tuebıngen, Tuebingen.

Tzermias, Pavlos (2005) *Aspekte der griechischen Philosophie von der Antike bis heute*. Narr Francke, Goettingen.

Wilson, Colin and Dossor, Howard F. (1999) *Nikos Kazantzakis: two essays*. Paupers' Press, Nottingham.

ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや 訳（2007）『定本想像の共同体 ： ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山（Benedict Anderson, *Imagined communities : reflections on the origin and spread of nationalism.* Verso, London and New York, 2006）.

C.M.ウッドハウス著、西村六郎訳（1997）『近代ギリシァ史』みすず書房（C. M. Woodhouse, *Modern Greece: a short history.* Faber, London）.

福田耕佑（2015/5）「カザンザキスの思想とギリシアナショナリズムー彼の思想の根本と文学作品のライトモチーフとしての「叫び」の観点よりー」東方キリスト教学会『エイコーンー東方キリスト教研究ー』第 46 号, pp.102-128.

松浦真衣子（2012/2）「ギリシア独立戦争における国民意識の誕生—拮抗する『エラーザ』像の起源」小沢弘明編『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告集　第 233 集ー近代ヨーロッパにおける地域再編成と社会秩序』pp. 29-60.

村田奈々子（2012）『物語 近現代ギリシャの歴史』中央公論社.

村田奈々子（2013/1）「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」法政大学言語・文化研究センター編書『言語と文化』第 10 巻, pp.181-205.